

ベトナム雑感

菅原 一孝

はじめに

私にとってベトナムは初めての訪問である。いろいろと見学をしたいと思っていたが、ダナン大学での3日間のシンポジウム、ハノイでの2日間の視察という短く忙しい日程で終わらざるをえなかった。

しかし、せっかくの機会でもあるから「だれでもどこでも同じモノが作れる」かどうかという技能・技術水準の可能性の観点から生活風景も含め諸々のものを見聞するように努めた。

ベトナムにおける技能や技術の集積状況とその分業関係の実態について具体的に接する機会が無かったので、私の想像的な飛躍と感覚的な偏見を前提として、モノづくりという面で感じたことを述べてみたい。

サポーターイングインダストリー

まず、サポーターイングインダストリーとは何かということから始めたい。今回のシンポジウムにおいては、サポーターイングインダストリーをどのように育成するかが大きな論点であった。一般的に発展途上国におけるサポーターイングインダストリーとは、進出する外資系製造企業を支えるローカルな部品製造企業群(サプライヤー)の裾野形成の可能性としてとらえられる傾向がある。

今回のシンポジウムでもそうだった。結果的には法的制度や投資環境の改善等の人為的な操作変数によってサポーター

イングインダストリーの育成を展望することに帰着し、おおよそは政策的な課題に集約されてしまった感がある。

人為的な操作変数によってサポーターイングインダストリーの可能性を展望することは必要だとしても、モノづくりに対する伝統工芸や技能的な遺産、職業に対する意識、労働に対する意欲、民主化の程度等の認識も重要であると思われる。

「だれでもどこでも同じものが作れる」技能と技術の蓄積の裾野こそが、その国の経済を支えるまさにサポーターイングインダストリーであると思われる。特にどのような伝統的スキルがどれくらい蓄積されているかで、その国の技術的な発展度合いが左右されると判断されるからである。モノづくり面における近代的な生産技術に対して、伝統的なスキルの遺産が大きく影響している場合が少なくない。技能と技術は表裏一体の関係にあり、人工衛星の表面仕上げも宇宙望遠鏡のレンズ研磨も最後は職人の手触りが決め手になっている。産業全般の技術的な発展を左右する潜在的な可能性は意外と伝統的なスキルの所産の有無に支えられることが多いものである。

伝統的な職人技能の伝承の先行きに不安を抱いたトヨタ自動車は、職人を養成する「ものづくり大学」の創設や運用にかなりのバックアップを行なっている。海外進出に当たって日本企業は、その辺の事情も加味しながら十分に事前調査をして、進出の適否を判断しているはずである。先

端的な技術に対する技能的な職人の対応も相当に大きな影響を及ぼすからである。そのような可能性がなければ大企業と中小企業の棲み分けのような分業関係の発展は展望されえないし、理想的な部品製造企業群(サプライヤー)も形成されえないものと思われる。

サプライヤーとしてのサポーティングインダストリーの可能性については、モノづくりにおける伝統的・文化的な所産の程度を認識することなくしては語ることはできない。最先端の近代技術を導入すればそれで解決という簡単な話ではない。「だれでもどこでも同じモノが作れる」という技能・技術水準の可能性があるかどうかで近代的な大量生産技術が可能になっていくものと考えられる。

ある途上国の事例である。外資の受け入れ条件を緩和して先端技術を導入して最新設備の工場を稼働させた。しかし、極細の線材をどうしても安定的に大量生産することが出来ない。微妙な品質のバラツキの発生を克服することができず、結局は中国に移転という事例もみられるからである。

モノづくりの文化的な類似性

日本の文化と非常に似たものを随分と感じた。まず一つは盆栽(鉢植え)である。大きなものを長年にわたり小さく保つという盆栽の技術は、根、茎、木、葉、土、水はけ等に対し根気を要するマネジメントによって可能となるが、ベトナムでは至る所に盆栽が観察された。どのような作り方をしているのかはわからないが、同じような背丈、同じような太さの盆栽が多く見られた。一般家庭ばかりでなく、工場やオフィスの庭先にも植木や盆栽が多く観察された。ベト

ナムでは何の変哲もない日常風景なのだろうが、正月が間近いのか小さな金柑のようなミカンがたくさん実を付けた盆栽の光景が印象的に写った。樹木の種類は花の咲く木や実のなる木が多かったような気がする。

墨田区、大田区、横浜・川崎の臨海工業地帯等には技能型中小企業群が多く集積しているが、意外とこのような地域では庭先や窓掛けに盆栽や植木が多く見られるものだ。どこまでも一様に小さくするというモノづくりの「縮み志向の文化」をベトナムでも感じた次第である。

もう一つは人形劇である。日本では伝統的な人形劇として文楽が有名である。浄瑠璃という暗い感じのする音曲に合わせて、3人の黒子役に動かされた人形の静かな動作によって感情を表現するというものである。ベトナムにも伝統的な操り人形劇がある。観光ガイドブックでも推薦していたので「水上人形劇」を見学することにした。

操り人形であることには変わりはないが、日本のものよりも複雑に仕込まれていて、エンターテインメント性が高いように思えた。しかも舞台は水の中である。人形の動作は激しく、登場する人形は農民、役人、魚、蛇、蛙等と多彩である。ベトナムの伝統楽器が奏でる明るい音楽や歌声に合わせて、リズムカルに複雑な踊りを披露する。人形を動かす黒子役は10人と多い。水中でよく糸がからまないものだと驚きながら感心して見てみている。

三つ目は家具や調度品である。街角の店で見た各種の伝統家具、漆工芸品、陶磁器等は、どれも細部にまで複雑にかつ精巧につくられている。デザインも色調も控えめなので、日本の住まいにも違和感

なく溶け込むような気がした。

もっと社会の隅々を細かく探索すれば、さらに多くの文化的な類似性に遭遇する機会があるかもしれない。小さなものや複雑なものを一様に創りだす文化は、工業技術の発展可能性と無縁ではないはずだ。

改良文化の創意と工夫

モノの絶対量が生活の豊かさの基準では無い。モノの絶対量が少なくても創意と工夫によって生活の豊かさをエンジョイする事はできる。二輪車や自動車のような移動手段の普及は世界的な必然であろう。街頭では設備投資の不要な移動式手押しガソリンスタンドが多く見られた。

ハノイ市内で遭遇した寺院では人間の格好をしたカラフルな塔婆が使われていた。いつまでも祖先を敬う行事として伝統を大事にしなが、昔からどこでも使っているのだろう。彼岸や命日には故人に対する想いが具体的なイメージとして彷彿されるような気がした。

いろいろな種類のベトナム料理を食べてみたが、どの料理も文字通り素晴らしい風味であった。海岸線が長く鮮度の良い海の幸が豊富なのか、ベトナム料理には魚介類が食材として使用されることが多いようだ。しかも非常に洗練された上品な薄味料理が多かった気がする。メニューの種類も多く日本人の懐石料理化の嗜好に最適なのもかもしれない。

異国料理との遭遇には当たり外れは付きものだという先入観をもってしたが、どの種類の料理を注文しても当たり外れということが少なくどれも美味しく食することができた。現在、ベトナム観光は日本の若い女性に人気の高いトレンドでもある。低カロリー

ーの美味しいベトナム料理も大きな誘引になっているはずだ。観光ガイドブックに掲載されているとおりである。とにかく美味しかった。

ダナン大学の人達に連れて行ってもらって食べた料理の中に、「揚げソフトシェルクラブ」という料理があった。ソフトシェルクラブは脱皮したてのカニである。越前海岸でも量は少ないが毎年1月下旬頃に水揚げされる。

皮が柔らかくハサミを使うことなく手で剥がして食べられる。柔らかい触感だが日本では三杯酢をつけるかサラダにして食べるのが一般的であろう。ベトナムの場合は皮が付いたまま油で天ぷらのようになりと揚げて調理されていた。何の抵抗もなく丸ごと美味に食べたが、最初は素材が何であるかわからなかった。少しの工夫を加えれば同じ素材でもずいぶん違った美味しい味に変質するものだと思心をした。

ベトナム料理は中国料理とフランス料理の影響を受けているといわれるが、大事なのはベトナム人の胃袋と味覚に合うように創意と工夫を駆使して、今あるような薄味で脂っこくないオリジナルな料理へとアレンジを繰り返してきたものと思われる点である。

150年前の日本でも欧米からピフテキやケーキが移入されたが、そのままでは、臭いがきつい、脂っこい、甘すぎる等の理由から直には普及することはなかった。匂いを減らすために牛肉を細かく切って、ネギを混ぜたり味噌で煮たりしながらスキヤキに改良していった。ケーキは甘すぎるので日本人の胃袋に合うように、糖分を減らして改良を繰り返した。ピフテキを筆頭に改良を重ねながら生活の中に融けこんできたものは多い。

外国の技術が導入されても改良に改良を重ねて精度の高いものへと洗練させていく可能性が展望されるかどうかも重要な指標であろう。飛躍と思うかもしれないが、料理は最適な判断材料だと思う。

民俗学博物館では、15,000 点の衣装、楽器、人形、帽子等生活諸道具が歴史的に展示されていた。これらを見ても生活のあらゆる局面に、素朴な創意と工夫の発揮が垣間見られた。

ハノイ市内のどの街角にもギャラリーが日本以上に多く目についた。これほど画廊が多いというのは、観光客を対象というよりも、創造的な世界を享受する風土が生活の中に息づいているからだろうと感動を覚えた。

いずれにしる、モノづくりにとって重要な要素ともいえる改良文化を促がす創意と工夫の多様性が、あらゆる場面で観察されたのは大変に意義深かった。

手先の器用さと精密加工

平面や直角、球形の究極をつくる技能や技術は簡単なようで実は難しい。金属を極限まで平らに加工することができれば、音は静かで滑りもより滑らかとなり、ボールベアリング(軸受け)の代替として利用することができる。日本では米糠の絞り粕を混ぜたセラミックスのような軸受けも開発されている。

真に平面なもの、直角なもの、球形なものを追求するには、最後は職人のセンサーのような手触り感覚によって手心を加えて仕上げられることが多い。より精密なものを追求しようとするには、手先の器用な熟練を要する職人層がどの程度形成されているかで決まる公算が高い。日本の大手ガラスメーカーではこのような職人層は

マイスターやスタッフとして優遇されている。

ベトナムの場合は、精緻な加工を要する観光土産品を見ても、手を抜くことなく丁寧に仕上げているように見受けられた。大理石の採掘・加工場のマーブルマウンテンを見学したが、手先の器用な彫刻(加工)職人が集まっているようだった。少々大雑把に写ったが、大理石加工の伝統的な技能の伝承と育成の場でもあるのだろう。

ダナン大学から土産品として頂いた球形のガラス製品は精密に仕上げられていた。加工方法はわからないが、地球を模した球形のガラスと受け皿のガラスの接触面が真に球形のように造られているため、手で軽く回せばベアリングも付いていないのにくるくると静かに滑るように回る。他のガラス細工製品を購入しても多分遜色はないはずだと判断される。

ハノイの街角では版画店も多かった。版木を何回も重ねてきれいな多色刷りを可能にする伝統的な版画技法は、江戸時代から継承されている日本の技法ときわめて類似しているように思われた。精巧な工業製品をつくる潜在的な技術の可能性は昔から普遍的な広がりをもっているものと感じられた。

ベトナムにおけるシルクは300種類以上ともいわれる。ハノイ市内のシルク専門店です土産品として刺繍入りの小さな絹製ハンドバッグを購入した。日本円の感覚からすると価格は非常にロープライスである。それよりも驚いたのはたいへん丹念に作られていることである。帰国して喜ばれたのは言うまでもない。ただ、ファスナー付きのポケットが外側にもあれば、もっと使い勝手が良くなるのにという注文がついた。

動植物やベトナムの風景をモチーフとした細かな絵柄の刺繍製品、布の模様や織り方も多様といわれるポーチ、バッグ類。どれも見事につくられている。

かつてジェット口に勤めていた友人によると、ナイキ社のアジア地区担当者は東南アジアでナイキのイメージした理想的なシューズづくりが可能なのはベトナムと日本の他には皆無であるという評価をしていたとのことだ。モリハナエも刺繍については90年以前からベトナムに外注をしているとのことであるし、婦人バッグをはじめメンズウエア、婦人ブラウス、高級紳士用シャツ等のアパレル分野では、日本の大手企業は既に進出をしている。

100分の1ミリの太さの縫製用ミシン針を製造している日本のトップメーカーは一部の針の製造についてはベトナムだけに移転させているという。その他電子部品、プリント版、自動車部品、ミシン部品、小型モーター部品、手術用縫合針、プラスチック精密部品等高精度が要求される加工分野においても、相当数の日本企業が進出を行なっている。

コスト面だけではなく、手先が器用で精密なものをきちんとつくる土壌を認識したからこそ、日本企業は進出したにちがいない。

さいごに

2004年版『海外進出企業総覧』（週刊東洋経済）によると、日本からベトナムへは207企業が進出している。統計数値はとかく漏れがあるので実際はもっと多いものと思われる。

ハノイでは日本に約2年間留学した体験をもつ若い男性ガイドに市内を案内してもらった。彼によると、あらゆるジャンルに亘り日本とベトナムの民間レベルでのビジネス交流が以前にも増して活発となり、通訳として日本に行く機会が多くなってきているという。外国企業との合弁話も最近では顕著に進んでいるらしい。Hotel Nikko Hanoiでは相当数の日本人ビジネスマンも見かけた。

私たちはサポーターリングインダストリーについて学者的な憂慮をしがちである。現実にはるかに前方を歩んでいるようだ。案ずるより産むが易しという気がした次第である。